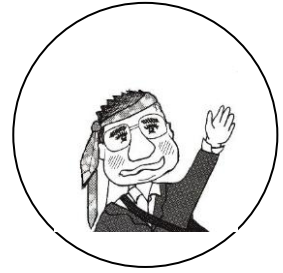


# 大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail: daimao@travelmitra.jp)

## タトゥーへの視線とイレズミ (3)

神聖な場所、寺院やモスクなどで、タトゥーは神聖さの冒涇とみなされるようである、と前号で書いたが、イレズミをしているから寺院やモスクに入城禁止となることはないようである。今のところわが輩の経験ではその現場に遭遇したことがない。

われ等外国人がモスクに半ズボンで入ろうとすると、色腰巻（ルンギー）を渡され、それを巻いて入ることになる。脚を露わにする、半裸で入ることは神聖さの冒涇とみなされる。イスラム教では、イレズミには賛否両論があるようだが、実際のところイレズミの有無確認のため、「服をぬげ！」などとチェックされることはない。

南インドのヒンドゥー寺院では、上半身半裸になり、白腰巻（ドーティ）を巻かなければ入聖室を拒否されることがある。これについて、今回のエピソードを披露しておこう。

今回わが輩は南インド・タミル州へ、スタッフのピーマ・りき丸はその西隣のケーララ州を案内することになった。偶然にも共通する訪問地があった。シャンカラの僧院である。読者諸氏はシャンカラという聖人をご存知だろうか。祖師シャンカラは8世紀の人、ほぼ空海と同時代の哲学者である。

シャンカラは各地を遊行し、インドの東西南北に四僧院を建てた。北のヒマラヤ山中ジョシーマート、東のプリー、西のドワルールカー、南のシュリングーリである。シャンカラは三十二歳で没したが、その法統は歴代の法主シャンカラチャリヤによって脈々と継承されている。わが輩は三僧院を訪れたことがある。西の僧院は未訪問だが、五十年程前に西のシャンカラチャリヤに会ったことがある。

りき丸組が訪れたシュリングーリ（カルナータカ州）を、わが輩は「インドの高野山」と呼んでいる。神秘的な霧につつまれた山奥の聖地である。法主シャンカラチャリヤに謁見（ダルシャン）することは可能だが、それには作法がある。男性は上半身裸、腰に白ドーティを巻かなければならない。女性はサリーなどの伝統的な服装をすることになる。ジーンズ姿ならインド人でも謁見堂に入ることはできない。一度だけ外国人だからということで許可がおりたが、後方から謁見することになった。直接的にも間接的にも法主に触れることは許されない。僧院境内には寺院もあるが、本尊を祀る聖室への入室は拒まれた、とりき丸は報告した。わが輩の記憶では、聖室に入った記憶がある。厳しくなったのかもしれない。

「イレズミをしている謁見者を見たかい？」

わが輩はりき丸に訊ねたが、「眼にしなかった」と言った。

大魔王組は、七大聖地の一つ、カーンチープラムの僧院を訪れた。達磨大師の出身地だとされている。祖師シャンカラは四僧院を建立したのち、この地にも僧院を設立した。祖師が微細な存在になり神と合一した場所とされている。わが輩は「分家」ではないかと思っている。何度か謁見したが、上半身裸になる

ことはなかった。分家の鷹揚さなのであろう。現在の法主ヴィジャイエンドラ・サラスヴァティー（第七十代）に、ジュニア・シャンカラと呼ばれていたところに会ったことがある。巡錫中で不在ということであったが、帰院されたところで偶然にお会いできた。謁見というより「廊下でばったり」といった感じである。どういうわけか気に入られ、ぶ厚い全集七巻と小冊子、駕籠一杯のザクロを頂戴した。嬉しくもあり、当惑困惑、いやいや有難い恩恵である。重い全集はとてもスーツケースに入らないので、新たにカバンを購入した。さすがインド製カバン、日本についたらすぐに壊れた。

ここでも上半身裸の参詣者を見た。わが輩が見た限りの彼らは、富裕層のようにみえた。肌が白くイレズミの痕跡などなかった。

現法主が「これから何処に行くのか」と訊ねた。聖地「ティルヴァンナーマライ」と答えると、「そこにもシャンカラ別院がある」と言った。「ラマナ・アシュラムに滞在する」と言うと相好が崩れた。只の観光客ではないと理解したようなのだ。それが有難い恩恵につながった。

2月15日はシヴァラートリー祭である。（シヴァ神、ラートリーは夜の意味）。前日に着いたが、アルナーチャラ聖山（周囲13キロ）は、すでにギリ・プラダクシナ（右回りの歩行巡礼）者で溢れていた。（ギリは山、プラダクシナは右回りのこと）13キロを人間の珠数でつないだように、列が途切れることがない。巡礼者は裸足で巡る。インド民衆信仰の莫大なエネルギーだ。

わが輩は、どれほどの巡礼者がイレズミをしているのか、観察を試みたが、人波を追うことができなかった。それに地肌が濃ゆいので、青や黒のイレズミの判別には無理があった。イレズミ調査は、これで終わりと思って食堂に入ったら、若い女性従業員（20歳前後）の腕にイレズミがあることに気づいた。

彼女の前腕・内側にローマ字で「Ananthi」と刻まれていた。聞けば彼女の名前だという。アナンティは、アナンタの女性名詞である。『The penguin Books of Hindu Names』によると、終りのないもの、死を越えたるもの、永遠、神性、龍（蛇）などの意味がある。このイレズミは、昔風の厄除け、災難除けではないように思えた。オウム文字やハート絵文字が彫られていたからである。つまり、ファッション、現代イレズミ文化の影響だと判定した。

これで教授へのお土産話ができたと考えていたら、もう一人個性的な男がいた。

われ等が滞在しているアシュラム（宗教的施設）に主殿（サマーディ・ホール）がある。だれでも参拝できるし、上半身裸、白腰巻（ドーティ）着用の規則はない。教えでは、モノ世界は空虚ゆえに「身体に拘わらない」ことになっている。身体の装飾（ピアス、イレズミ等）は避けた方がよい。

主殿の前庭に、軍人用ゴーグルをかけたあの男が座っていた。彼は“見せたい男”マッコマンである。脚は短く、上半身は筋肉隆々で、浅黒い肌をしている。全身イレズミなのだが、浅黒い肌のため判読できない。背中に大きく女神が彫られ、左腰にどこかで見た顔が彫られていた。新教祖シュリ・シュリ・ラビ・シャンカルであった。

これは教授へのベストなお土産話になると思い写真を撮りたかったが、境内撮影禁止のため諦めた。

アシュラムをでると、路地にあの男がいた。（チャンスだ！）

ところが、彼はなぜか金属製ヌンチャクを振り回していた。

「ジャイ！ シュリー・シュリー・ラーマ！」（万歳ラーマ神よ！）

その次がいけない。「バーラト（インド）はヒンドゥーの国だ！ ムスリムは出て行け！」

このヒンドゥー教右派のおっさんは、アヨーディヤー宗教問題を声高に叫んでいた。

軽々に「写真を撮らせて」と頼もうなら、ヌンチャクでゴツンと叩かれるかもしれない。（撮影中止）

イレズミもハート絵文字程度ならご愛嬌だし、昔風の災難除けなら素朴でよい。ヤクザの入れ墨のように他者を威嚇する（道具）はいただけないものだ。